



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二三号）

しゅんぶん
春分

三月二十日

彼岸潮

春先のお祭りや行事は、「春を呼ぶ」と言われます。

なかでも、関西地方でよく知られるのが奈良東大寺の「お水取り」。早春の闇を赤々と照らす松明は、じつは三月一日から十四日まで連日上がり、千二百年の歴史をもちます。昭和二十五、六年は「お水取り」が終わっても三月の寒の戻りが厳しかったため、「どんなお水取りをやったのか、もう一度やり直せ」というはがきが寺にまい込んだこともあったとか。春を呼ぶ行事に寄せる人々の思いが伺えます。

また、「暑さ寒さも彼岸まで」といわれてきたのが、二十四節気の春分です。一年を二十四に分ける節気は、二至二分（冬至・夏至・春分・秋分）と四立（立春・立夏・立秋・立冬）を骨格としています。四立は四季の始まりを、二至二分は四季の中央を示しています。なぜ春分なのかというと、「春九十日（立春から立夏前日）の真ん中であるからこれを分とする。夏至は分と言はず」（『滑稽雑談』正徳三年）とありました。一日の昼と夜の時間が等しくなる日を「分」とし、一年で最も昼が長い、短い日を季節が極まるという意味の「至」にした、古人の感性にはすばらしいものがあります。

この春分の頃の大潮を「彼岸潮」といいます。潮の干満は主として月の引力によりますが、月と太陽の位置が地球と一直線上にある満月と新月の頃にその力が最大となります。そのため、よく潮が引き、大潮と呼ばれる現象がおきるのです。伊勢湾でも干潟が広がり、ふだんは見えない磯が姿を現すことも。潮干がりの好機です。

など着せぬ岩に烏帽子を春の海

言水

江戸時代の俳人が、二見浦で詠んだもの。夫婦岩のあたりでしょう。よく潮の引いた海辺で烏帽子のような岩を面白がって詠んでいます。今年の大潮は三月二十三日から二十五日、よく潮の引いた海辺で春のエネルギーを感じたいものです。

